

漢字と情報

No. 18
2009・3



京都大学人文科学研究所 Documentation and Information Center for Chinese Studies (DICCS)
附属漢字情報研究センター Institute for Research in Humanities, Kyoto University



- センター改組計画の史的観点
- 郭沫若「卜算子詠梅」扁額始末
- 人文研のアーカイブス(18) ガンダーラ石彫

センター改組計画の 史学的観点

井波陵一

人文科学研究所附属漢字情報研究センターの前身である東洋学文献センターは、日本学術会議の勧告に基づくドキュメンテーション・センター構想の一環として、1965年4月に発足した。以来、人文科学研究所の前身の一つである東方文化学院京都研究所がおこなってきた資料収集および学術情報公開の事業を継承発展させる形で、漢字文献の収集や目録の編纂に努めるとともに、東洋学へのコンピュータ利用にもいち早く取り組み、1980年代には東洋学関連の論文目録データベース（毎年約2万件）を年度ごとに作成、公開して、現在に至っている。また漢字文献のデジタル化を本格的に推進するために、2000年4月、情報学の研究者を専任スタッフに加えて漢字情報研究センターに改組し、デジタル・テキストやデジタル・カタログの作成において内外から高い評価を受けている。

所蔵資料をたんにデジタル化するばかりではなく、たとえば石刻拓本資料の場合、先行して作成された拓本全体のデジタル画像に基づいて、様々な書体で刻まれた元の文字と今日一般的に使われる文字とを画面上で対応させる「拓本文字データベース」を構築することにより、時代ごとの書体の変遷や流行を追跡できるようにした。王国維の「史籀篇疏証」や「戦国時秦用籀文六国用古文説」における指摘ではないが、旧字と新字と言われると、旧字が先にあり新字が後に続くという単線的発展史をついつい思い浮かべてしまう。しかし「拓本文字データベース」で「來」もしくは「来」を検索すると、文字成立の専門的考証はともかくとして、両者がいかに日常的に混在、共存してきたかという事実を突きつけられ、改めて驚かざるを得ない。

また他の大学図書館や公共図書館との連携事業である全国漢籍データベースの場合も、たんにそれぞれの漢籍目録をデータベース化するのみならず、テキストの画像を附加することで、版本研究における利便性を向上させることに努め、さらに本センターが所蔵する漢籍については、テキストの構成や出版に関する所内研究会の調査結果をそのつど公開することで、データベースの利用価値を高めている。さらに2009年3月に開かれる全国漢籍データベース協議会総会では、この研究会の成果を直接公開すべく、「普通の本でも十分におもしろい」と銘打って、目録情報からは見えてこない「本を手取る楽しみ」を、実物を目の前に置いて解説する予定である。この試みは今後も続けてゆきたいと考えている。

デジタル・テキストやデジタル・カタログの作成におけるこうした実績を踏まえて、本センターではフィールド研究史料（たとえば発掘調査における多数の写真資料）をデジタル化することで、さらに研究者にとって有用な学術情報を提供していきたいと考えており、東洋学と情報学の融合をより一層推進するという意味で東アジア人文情報学という名称を選んだ。すでに21世紀COEプログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点——漢字文化の全き継承と発展のために」においても、プログラム終了後、漢字情報研究センターを東アジア人文情報学研究センターに改組して、その研究成果を継承、発展させることを打ち出している。

人文科学研究所の共同研究は、古典文献の精密な読解と詳細なフィールド調査を二つの大きな柱としており、それは東方文化学院京都研究所以来、東アジア研究においても変わらない。東洋学文献センターと漢字情報研究センターでは、おもに前者、すなわち古典文献の精密な読解を推進するために文献収集やデータベース作成に取り組んできたが、学術情報の提供という点から言えば、今後は必然的に後者のフィールド調査史料をデジタル化して研究の発展に資することが求められる。

たとえば1938年に始まった雲岡石窟の調査は、1945年3月の東京大空襲により製版中の報告書原稿が焼失するという打撃を蒙りながら、1951年に『雲岡石窟』と題されてその第1冊が刊行され、それを時の首相吉田茂がサンフランシスコにおける講和条約締結の際に持参したことはよく知られている。最終的に全16巻32冊に達した『雲岡石窟』は、人文科学研究所の数ある成果報告書の中でも抜群の存在感を誇っている。だが言うまでもなく、この巨大な報告書を生み出した原資料として歴大な調査記録や写真が残されており、それらは今でも研究所の一隅に保管されている。

調査開始から70年以上、報告書刊行から半世紀以上経過した今日、デジタル化技術の進展に伴い、原資料が再び脚光を浴びることになった。内容や撮影場所を特定して公開した写真資料を、世界中の人々がインターネット上で直接利用できるようになれば、雲岡石窟の歴史的、文化的あるいは宗教的意義を深く認識できるようになるし、専門家には『雲岡石窟』の基礎となる貴重な資料として歓迎されるであろう。

本センターが様々な学術情報を提供すべく、柔軟な発想と幅広い知識を求めて多くの方々に協力をお願いし、しばしば「身の丈を越えた」と揶揄されるほどに活動の領域を広げようとするのは、東方文化学院京都研究所の設立に当たって、その学風が大きな影響を与えた王国維の「史学的観点」を変わることなく重視したいと願うからである。彼は言う。

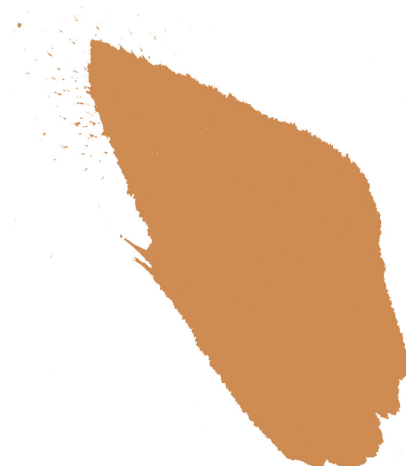
「学問に新旧はないという根拠は何か。真正を求め科学的観点よりすれば、聖賢の言行であっても一概に信用しない。聖賢は真偽を区別し是非を明らかにしたのであり、真偽や是非は聖賢が定めたのではないからだ。史学的観点よりすれば、今日から見ると真正でない学説や制度風俗にも研究する価値がある。それらが成立し、当時の社会に受け入れられた理由が必ずあるからだ。物理学の歴史では謬説が、哲学の歴史では空想が、制度風俗の歴史では無用の物がその半ばを占めている

が、史学家は捨てない。これが二つの学問の相違である。しかし科学を治める者は必ず史学上の材料に待つものがあり、史学を治める者の方でも科学上の知識を欠くことはできない。今の君子は、何でも蔑古でなければ、何でも尚古である。蔑古派は科学的見地のみ、尚古派は史学的見地のみ、そして折衷派も取捨の然る所以を理解できていない。これが新旧の説の存在する理由である」（『国学叢刊序』）。

手前味噌であるが、筆者は本センターが1972年からおこなっている漢籍担当職員講習会の冒頭の講義において、最近次のように述べることにしている。

「皆さんがこれから学ぶことは、京大人文研が、1929年に創設された東方文化学院京都研究所このかた培ってきた漢籍に関する知識です。私どもは自信を持ってそれをお伝えしたいと考えていますが、漢籍に関する知識は決して当研究所の専売特許ではありません。国内を見渡しただけでも異なる考え方はありますし、中国を含めればなおさらです。皆さん、どうか「ひとつしかない」と思いこまないようにして下さい、「いくつもある」と理解して下さい。そしてこれが一番大切なことですが、異なる考え方が出て来た時に、「どちらが正しいか」という発想をなさらないようにして下さい。結果の是非ではなく、「どうしてそのようになるのか」という、それぞれの思考のプロセスについて考え、その拠り所を理解するようにして下さい」。

これもまた、ささやかながら「史学的観点」を踏まえた発言だと信じた。 （センター教授）



郭沫若 「卜算子詠梅」扁額始末

永田知之

京都大学人文科学研究所（人文研）の本館（当時）で奇妙な扁額（写真参照）が見つかったとの第一報が所内を駆け巡ったのは、2008年3月のことである。現所屋への移転たけなわの折から発見、否むしろ不要品共々廃棄される寸前に救出されたという方が適当だろう。以前どこにあったかはいざ知らず、その時点で置かれていたのが男子更衣室の片隅だったときは。

問題はその揮毫者が郭沫若（1892～1978）だという点に在る。留学・亡命時期を通して約20年間日本に滞在したこの人物は文学・歴史・考古学の諸分野で大きな足跡を残すのみならず、革命運動に身を投じ、政務院副総理・中国科学院長・全国人民代表大会常務副委員長の要職をも務めた。

表向き「中国古典文学専攻」の看板を掲げる筆者は、現代史に全く不案内である。ただ、扁額に書かれていたのが詞（古典的な韻文の一種。以下この作を郭詞と呼ぶ）だったため、とりあえず訳読してみた。ガラス板で表面を保護された扁額は全体、文字部分の縦横が各々52.5×103.5、41×75（cm）、郭沫若は書法でも名高いが、それについて論じる資格も当方は全く持ち合わさない。

曩見梅花愁，今見梅花笑。本有東風孕滿懷，春伴梅花到。風雨任瘋狂，冰雪隨驕傲。萬紫千紅結隊來，遍地吹軍號。

一九六四年九月廿六日書

卜算子詠梅一闋

郭沫若（朱印「郭沫若」）

〔大意〕愁わしげだった梅の花も、今は笑う（咲く）姿を呈する。東風を孕んで春は梅と共にやって来る。風と雨、氷と雪は放っておけ。花の軍隊の下、進軍ラッパが鳴り渡る。

「卜算子」は詞牌（詞の一形式）で、「詠梅」は

その内容を示す、実際上の表題に当たる。「一闋」（詩でいう一首）全体を通して、偶数句末で後掲の毛詞と同じ脚韻を踏む。

郭詞はある事情を背景に詠まれた。即ち、当時の中国共産党主席・毛沢東（1893～1976）が先に作った詞（毛詞と称する）に触発されて、郭沫若は同名の作をものしたというのだ。

風雨送春歸，飛雪迎春到。已是懸崖百丈氷，猶有花枝俏。俏也不爭春，只把春來報。待到山花爛漫時，她在叢中笑。

〔大意〕風雨に見送られ、飛び交う雪に迎えられて春はやって来る。崖に百丈の氷柱が垂れ下がる中で、早くも梢に花を付ける。（他者と）春（の妍）を争わず、ただ春の到来を知らせる。山の（他の）花が盛りを迎える時も、彼女（梅）は草むらの中で笑っている。

「梅」は古来、他に先んじて開花し、地味な姿とその香りで春の訪れを告げる花というイメージをもたれてきた。ここに挙げた毛詞にもそれが生かされている。そもそもこの詞に典拠が存在する。南宋の詩人・陸游（1125～1209）による完全に同題の作品がそれだ。

駅外断橋辺，寂寞開無主。已是黄昏独自愁，更著風和雨。無意苦争春，一任群芳妒。零落成泥碾作塵，只有香如故。（『渭南文集』卷四九）

〔大意〕宿場外れの崩れた橋のたもとで、（梅は）寂しげに咲き愛でる者も無い。はや黄昏時、独り心配げな風情で、更に風と雨を受けている。春（の妍）を争う気は無いが、多くの花に嫉まれるまま。地に落ちれば泥になり碾かれれば塵となり、元どおりなのは香りばかり。

毛詞には「陸游の詠梅詞を読み、其の意を反して之を用う」という注が見える。つまり、「卜算子詠梅」の表題で同じ形式・題材を用いながら、陸游が梅の孤独を詠むのに対して、梅自体は季節の変化を知らせられれば満足だろうと毛沢東は捻りを加えたわけだ。

このまま受け取って何も問題は無い。だが、古典詩詞は往々にして深層の意図を有する、乃至そ



漢字と情報

5

うあるべきとされてきた。この‘法則’は書き手を縛り、また読み手の側にも単なる抒情・叙景にさえ時世に感じた表現として政治性の観点に立つ狭隘な解釈を多く強いる結果となった。

ただし、今の例ではかかる態度もあながち的外れではないと思しい。それというのも毛沢東は毛詞を作る前、参考として梅に関する古来の詩詞をわざわざ調査させている（董辺、鐔徳山、曾自編『毛沢東和他的秘書田家英』中央文献出版社、1989年、108-110頁）。彼ほどの政治的人間が周到に準備して著した作品ともなれば、何かを探り出したくなるのも人情だろう。

「梅」を毛沢東（乃至彼ら人民の先駆けとなりながら功を誇らない者）、「百丈の氷」を困難、「春」はその後に来る喜びと取る点は、諸説概ね一致する。その上で曰く「百丈の氷」は共産党

主導の革命以前における中国の窮状、この詞の主題は社会主義革命の成功」。また曰く「1950年代の大飢饉が「百丈の氷」、その克服を詠っている」。このあたりが現代中国における毛詞解釈の大勢か。ところが、次に列挙する当時の情勢を考慮すれば、別の見方も可能になる。

1959年4月 毛沢東、経済上の失政で国家主席を辞任（党主席には留任）。

1961年12月 毛詞、作られる。この頃、毛・郭の両者、詩詞を遣り取りする。

1962年1月 毛沢東、共産党の幹部会議で自己批判に追い込まれる。郭詞、著される。

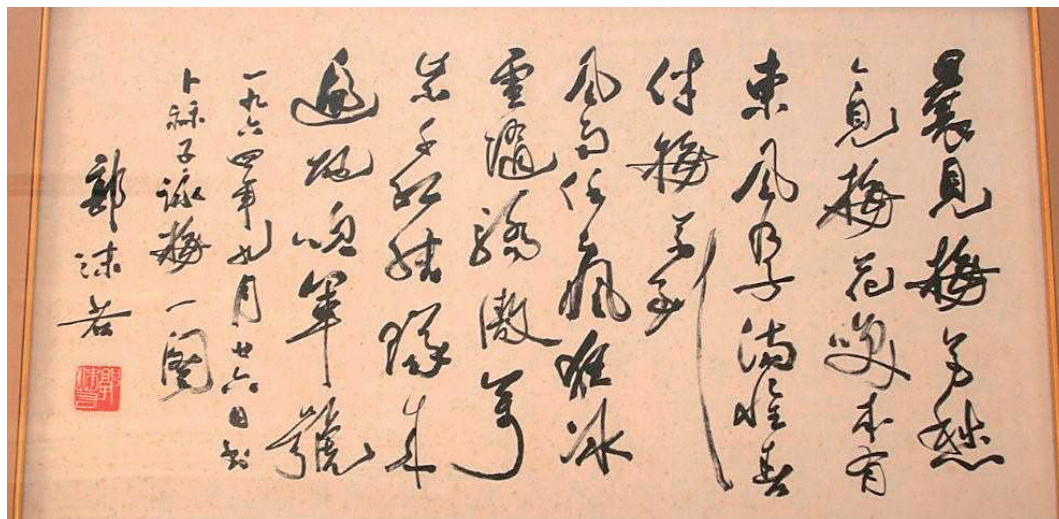
1963年11月、12月 郭詞を収めた郭沫若『東風集』（作家出版社）、毛詞を含む毛沢東『毛主席詩詞三十七首』（文物出版社）刊行。

1964年9月 郭沫若、前掲の扁額を揮毫。

1966年 毛沢東、文化大革命を発動、再び完全な最高権力者に。

（小文に挙げた郭沫若の事跡は主に龔継民、方仁念『郭沫若年譜（増訂版）』天津人民出版社、1992年、による）

実は毛沢東自身が後の文革期に辣腕を振るう側近・康生（1898～1975）宛ての1962年1月12日付書簡でこう記す。「（毛詞は）修正主義に反対するものだ。……（これを）郭沫若に送って読ませて



やってくれ』（『建国以来毛沢東文稿』第10冊，中央文献出版社，1996年）。

「修正主義」は第一義的に当時のソ連・フルシチョフ政権による自由化の傾向を指す。中国はこれを社会主義の漸進化として激しく非難，所謂「中ソ対立」が展開された。

この記述に従えばどうなるか。「百丈の氷」は修正主義であり，中国がその影響を受けてはならぬ，「梅」である指導者層は努力せねばならないという意味に取れる。穿ち過ぎかもしれないが，後に起こる事態との関連付けも不可能ではあるまい。つまり，「百丈の氷」＝毛沢東退場後の現政権担当者（後に文革でやはり修正主義者と批判され失脚），という図式だ。

この場合，「梅」は毛沢東，「春」はその復活であり，奪権闘争（文革）を目論む彼の意図をそこに見出し得る。いずれにもせよ，嘗ての権力を喪失した時期に彼が作った毛詞より自身の関知せぬ場で外交・内政が動くことへの焦りを見て取るのはそう不自然でもない。

さて，郭詞の方に戻ろう。「“待到山花爛熳時”一讀毛主席發表的詩詞《卜算子・詠梅》」（『人民日報』1964年3月15日）という文章で，郭沫若は夙に毛詞を見て，郭詞を作ったと述べている。その上で毛詞は制作当時，反中共を喧しく唱えていた米帝国主義（即ち，これが「百丈の氷」）を批判，米国の脅威には屈せぬという主旨の作品だと主張する。

毛沢東は何故，公表前の毛詞を郭沫若に示したのか。文壇の大御所から意見を徴するのはその理由の一つだろうが，真相は明らかでない。一方，郭沫若が毛沢東の「反修正主義」意識を知っていたかも定かではない。ただ，当否はともかく，この前後，彼は「毛主席の詩詞をどう読むべきか」という主題の文章を続けて発表している。政府要人たるその地位からして，それらは毛沢東思想に対する政府公認の注釈として機能したと見える。

党主席の詩詞に潜んだ‘憂国の情’を喧伝し，更に「進軍ラッパが鳴り響く」と勇ましく唱和す

る。人文研所蔵の扁額に見える文字は上海滯在中の郭沫若が筆を執ったものだ。何のためにこれを書いたかは不明だが，繰り返し同じ郭詞を揮毫した（『郭沫若年譜』1964年3月20日，翌年春，秋にその実例が記される）点から見て，毛沢東との親密さを顕示する意図は否定できない。

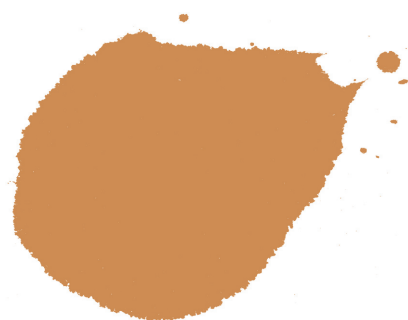
唱和・喧伝・揮毫，みな迎合といえればそれまでである。しかし，これら一連の行為も相俟って，郭沫若は文革期にも失脚を免れた。日中戦争を挟み中華民国から人民共和国へ至る激動と重なる生涯を，学術と政治に軸足を置きつつ，彼はこうして全うすることに成功した。ここに我々は自分たちには与り知りようも無い時代の厳酷さ，知識人のしたたかさを見るべきかもしれない。

それにしても革命家であるはずの毛・郭両者は前近代の産物たる詞を用いて曰くいい難い心情を吐露し，また「迎合」もしていた。1960年代の中国では，こういった有り様の是非はさて置いて，どうやら古典文学はまだ‘生きていた’らしい。

扁額の写真と筆者が身を置く人文研分館にある資料を睨みつつ，妄想を逞しくしてみた。この上は本館に赴いて調査せねばと思っていた折も折，本当は「この扁額はレプリカ」との続報が届いた（その後，実際に検分した結果，やはり複製品と思しきことが分かった）。

かくてこの拙文は「人文研のアーカイブス」欄ではなく，こちらへ載ることになった。ただ少々負け惜しみめくが，郭沫若の肉筆でないにせよ，何故この書跡が複製されたかという疑問はなお残る。件の扁額は現在，新しい本館書庫の一隅で人知れず放置されているが，人文研に入った経緯を含め，各方面よりご教示賜れば幸いである。

（センター助教）



人文研のアーカイブス (18)

ガンダーラ石彫

パキスタン・タレリ寺院址出土

向井佑介

ガンダーラは、漢訳仏典や入竺僧らの旅行記に「健陀衛」「健陀羅」「乾陀羅」「健駄邏」などと記され、現在のパキスタン北部、ペシャーワル盆地を中心とする地域に相当する。ガンダーラへ伝えられた仏教は、クシャーン朝のもとで隆盛し、すぐれた仏教彫刻を生み出した。その仏教寺院の大半は消失したが、わずかに山麓に残る寺院の遺跡が往時の繁栄をものがたっている。ガンダーラ盆地の北東に所在するタレリ寺院址は、そのような山岳寺院のひとつである。京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン調査隊がこれを精力的に調査し、1963・64・67年の3次にわたり発掘を実施した（水野清一・樋口隆康編1978『タレリ ガンダーラ仏教寺院址の発掘報告』同朋舎）。

表紙に掲載した石彫は、1964年にタレリ寺院址のD地区（写真）から出土したものである。D地区は、遺跡群西方の谷間にある塔院区で、主ストゥーパをとりまく祠堂（D23）からこの石彫が出土した。ガンダーラで多用された片岩を素材とし、下部を欠損するものの上半は残りがよい。幅32×高さ15 cmをはかる。アカンサス柱頭を戴く



柱形によって区切られたふたつの空間に、それぞれ異なる説話を彫りあらわしている。およそ2～4世紀に製作されたものと思われる。

向かって右側の場面は、「獼猴奉蜜」の説話をあらわしたものの。釈尊が弟子らとともに池のほとりを通りかかったとき、その鉢をサルが手にとり、蜜を満たして釈尊にさしだした。釈尊はその蜜を水で薄めて皆にいきわたるようにした。サルはそれを見て、踊り跳びはねて歓喜し、勢いあまって大きな穴に落ちて死んでしまった。しかし、その功德によってバラモンの子供に生まれかわったという（『賢愚経』卷十二ほか）。彫刻では、仏陀の右に蜜入りの鉢をささげるサルを、左には跳びまわって喜ぶサルのすがたをあらわしている。

向かって左側は、「帝釈窟説法」の場面をあらわしたものの。釈尊が山中の石窟中で瞑想していたとき、帝釈天らはその教えをきくために楽神をつけてこれをたずねる（『長阿含経』卷十ほか）。右側のアーチが石窟をかたどり、そのなかで仏陀が結跏趺坐する。左側には琴を弾きながら歌う楽神の姿があり、そのうしろで合掌しながら説法に耳をかたむけるのが帝釈天である。

このように、仏陀の生涯をあらわした仏伝や、その前世の物語である本生などの仏教説話は、しばしば石にきざまれて仏教寺院を荘厳した。こうした彫刻は、寺院の中心的なストゥーパだけでなく、周囲に奉納された小型ストゥーパにもかざられた。仏陀にかかわるさまざまな物語を視覚的にあらわすことで、人びとは仏陀の教えを身近に感じ、信仰を深めたのである。

紹介した彫刻は、形状や大きさから、小型ストゥーパの基壇部分と推定される。そのストゥーパ基壇の一辺は、石彫の幅と対応しており、30 cmあまりしかなかったことがうかがえる。これを出土したのは、主ストゥーパのほぼ正面に位置する祠堂であり、同様の祠堂が周囲にたちならんでいた。このような仏教彫刻でいどられた小さなストゥーパが、仏教寺院のなかに数多く奉納されていたのであろう。（センター助教）

HP・TOPICS

今回は、人文研本体のHPを紹介しようと思う。トップページの「お知らせ」には、新着のイベント情報や出版物の案内が掲載され、とても見やすい画面であると好評である。当初は簡素なものだったが、附属センターの新設や人文研アカデミーの開講により、充実したコンテンツとなった。現在のデザインは、ネットワーク担当の小林さとみさんが大幅に手直したものである。彼女は、いつもシステム障害やスパム対策に有能な技能を發揮してくれるが、HPが機能とセンスの両面を兼ね備えているのは、その人となりを反映している。

漢字情報研究センターのHPは、発足時に高田雄教授が中心となって作成したもので、シンプルさを売り物にしてきた。今春の改組に際して、HPをリニューアルしようと準備中であるが、その制作スタッフには小林さんにも加わってもらえることになったので、大いにグレードアップできるのではないかと期待している。

京都大学 人文科学研究所
Institute for Research in Humanities, Kyoto University

最新 講演会 研究所 研究活動 図書室 出版物 アーカイブ 目次

人文科学研究所紹介 ■ お知らせ ■

- 沿革
- 組織・機構
- 交通と地図
- 図書と資料

所員の研究活動

人文科学研究所
-個人研究
-共同研究

東方学研究所
-個人研究
-共同研究

公開講座・講演会

研究報告書
紀要
-東方学報
-人文学報
-論文紀要

所蔵『人文』

図書室
-利用案内
-蔵書
-教員書庫
-修復講座

DB・アーカイブ

メディア報道

更新履歴

所内情報
(所内の閲覧可能)

【02.17】3月7日に人文国際研究センター講演会「The Contested Legacy: The Mongol Factor in the Manchu Conquest in China」(プリンストン高等研究所 Nicola di Cosimo 教授)を開催します。

【02.16】「近代京都研究」共同研究班の活動が京都新聞に掲載されました。

【01.21】国際シンポジウム「変化する人種イメージ表象から考える」の映像がオープンコースウェアに掲載されました。全講演が視聴出来ます。

【01.20】「近代京都研究」共同研究班の活動が朝日新聞に掲載されました。

【12.15】第五回東京漢籍セミナーを開催いたします。

【09.09】10/16、11/20、12/18、1/15、2/19(各木曜日)にNHK文化センター大板教室で人文研アカデミー「時代を生きた女性たち〜ヨーロッパ編」を開催いたします。

第12回京都大学国際シンポジウム
「変化する人種イメージ表象から考える」

漢学文化の会き継承と発展のために
京都大学21世紀COE
東アジア世界の人文情報学研究拠点

その他のご紹介
◎国立大学附属研究所・センター長会議
◎財団法人人文科学研究会
◎海外の東方学研究者による人文科学研究所の取
育研究活動についての記事
◎所員のホームページ
◎研究機関・図書館へのリンク

All Rights Reserved. Copyright (c) KYOTO UNIVERSITY
このホームページに関するお問い合わせは annei@zinbun.kyoto-u.ac.jp
京都大学のホームページへ

[DICCS NEWS]

- ・第44回全国文献・情報センター長会議を2009年1月30日(金)に京都大学百周年時計台記念館会議室Ⅲにて開催した(本年度はセンターが当番校)。議題としては、四センターの現状と課題についてそれぞれ発表した後に、拠点化計画などの情報を相互に交換し、今後の連携のあり方を討議した。また、翌日には、北白川のセンター会議室において、全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セミナーを開催し、四センターが取り組んでいる事業に関して研究成果や今後の計画について発表&討論を行った。
- ・全国漢籍データベース協議会第9回総会を下記のプログラムで行った。

日時：2009年3月6日(金) 14時～16時

会場：国立情報学研究所1208・1210会議室

今年度の事業報告 井波陵一教授

普通の本でも十分におもしろい—漢字情報研究センターの漢籍について

「司馬温公年譜、王荊公年譜」 藤井律之助教

「会稽志、会稽統志、熙朝新語」 高井たかね助教

東大東文研図書室のアジア古籍保全事業

田崎淳子係長

(東京大学東洋文化研究所)

- ・「第5回 TOKYO 漢籍 SEMINAR」を2009年3月7日(土) 10:30-16:00に学術総合センター2階中会議場にて開催した。今回の講演は、人文研附属現代中国研究センターのスタッフを講師とし、テーマは「漢字文化と西洋近代思想の出会い—梁啓超を中心に」である。

民族主義と梁啓超

小野寺史郎助教

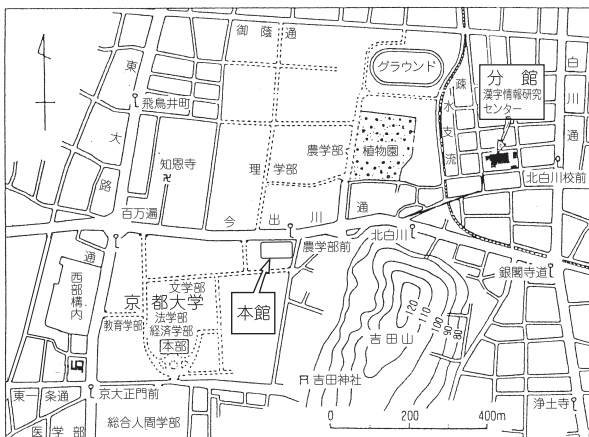
「眠れる獅子」のイメージと梁啓超

石川禎浩准教授

西洋近代経済学と梁啓超

森 時彦教授

- ・「東洋学へのコンピュータ利用 第19回研究セミナー」は、2009年3月27日(金)に行う予定である。



発行日 2009年3月16日

発行所 京都大学人文科学研究所附属
漢字情報研究センター

〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47

電話 075-753-6997 FAX 075-753-6999

http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/